『一時軒独吟自註三百韻』語釈と考察（二）

大江　あい子

本稿は、惟中の俳諧を研究する一端として、『一時軒独吟自註三百韻』に語釈と考察を付すものである。底本には、天理図書館綿屋文庫の『俳書集成』第六巻「談林俳書集一」所収の影印を利用させていただいた。また今回は、自註のある独吟百韻のうち一七句目から五〇句目までを掲載する。

〔一七〕

一鉢をまうくれば其とをりなり
　出家を釈氏（シヤクシ）といふ也。むつかしき所なれば、とりなしたる也。

〔語釈〕

○一鉢をまうくれば　『邦訳日葡辞書』「鉢」の項に、「鉢を開く」として「寄進を乞い求める」とある。前句の「杓子」を出家者の意の「釈氏」に取り成して、「一鉢をもうくる」と付けた。**○釈氏**　釈子に同じ。『邦訳日葡辞書』には、「釈迦の系統を引く子孫」とある。**○むつかしき所**　前句が、「杓子はあるにまかせたりけり」という「やり句」であったため、付け句に思案を要することをいう。**○とりなしたる**　取り成し付を用いたこと。「取り成し」とは、前句の意味や語を別の意味に転じて付ける手法。→〔考察〕

〔考察〕

「取成付」あるいは「執成付」は、連歌以来の手法として早くから浸透していた。連歌師宗祇は、文正元年（一四六六）作の『長六文』で「執成」に触れている。

執成の連歌とて、近年其類おほく候、宗砌などの仕つり候句にも宜しからざるも侍也、其外人の仕つりたるに大略悪しきのみ（に）候、例へば狩人といふ句に、稲葉蘆など付事大に然るべからず候、かりばと言ふにも同事候、世のよを夜分に取なして、後世といへば（夕暮、末の世といへば）暁など付侍る事しかるべからず候、（唯）日文字を火の字に取なしなどの事よろしからず

また同時期の書で、宗祇の作とされる『連歌秘伝抄』では、「執成手仁葉、一體なり、あながちに不好」と前置きして以下のように記される。

うらみてだにもなぐさみにけり
松原のしほひにかすむ旅の道
　浦さびしくも見ゆるゆふぐれ
まちえてもたゞ一筆の文はうし

をくるをつらくおもふあかつき

月見よと風の吹しく窓の竹

此句、恨みてと云に、松原の鹽干を付られたるは、人の恨を水邊浦にとりなせり、又水邊の浦を文の裏にとりなし、人の送るを竹の起付すに取りなされたり、よろづ如此體を自然に執合せ、御沙汰あるべし、

また宗祇の弟子の宗長が、永正六年（一五〇九）頃の成立とされる『連歌比況集』で、やはり「取成付」に言及している。

取成連歌は少もあまら（ず候）べき物也、例へば人の子を養ひて我子になすが如し、我子さへ長ものび世心づけば、思ふまゝに親の心に随ふ物はなし、況や人の子たらんは爭か大方に（なし）侍らば添ひも果つべきや、其ごとく別の事を似たる事にとりなして付おとさん事、凡そにては不可叶、（たとへば、）

蓑なき（道）は春雨もうし　と云句に

かる宿に露のやまぶきおり侘て　是は祇公の連歌也、能〳〵吟（じ）合て事を見るべし、七重八重花はさけども山吹のみの一つだになきぞかなしき

俳諧においては、寛永一八年（一六四一）刊行『誹諧初学抄』で徳元が、「とりなし付」に触れている。

体付・とりなし付・心付とて三つの品あり。たい付と申は、前句の心をかへずして、その趣を能いひなすを言り。是、作のなき付やう也。次にとりなし付と云は、前句の詞をあらぬ事に取なし付也。是は作を以付也。また心付と云は、或は漢古事、或は詩歌・物語やうの風情などにて付也。たとへば、

身のしほはたゞこぼれかゝれり

まゆくろくわらふえがほにゑくぼゐで

右たい付也。

はらみぬるみの行末のいかならん

ふし立さなへ出来過てけり

右とりなし付也。

春日の里にゆかりこそもて

ぬぎきせむ若紫のすり小袖

此句は心付也。右付合どもよくも侍らね共、そのしな〳〵詞に記しがたきまゝ如此。

寛永一九年刊行の『俳諧之註』では、貞室が「取成付」を奨励している。

絵所の縁はいつしかさだまりて

きりちがへて付たり。仏師絵所と云つけたるか。「絵所の縁」、重詞なり。

杉さうじまで出来る造作

縁つゞきに杉障子あるもの也。必絵を書所なり。「定りて」と云には、造しめたる心にて付たり。此句は取なし也。俳諧は取成付を宗とすべし。連歌のいきは本意ならざる也。此百句は新きやうにと斗心得侍る故、取成の付合をあまりえせず。又、いかに取なしを宗とするとても、木に竹を継たる一句はこのまず。其上、毎句に取成て四手〳〵とすれば、一寸法師の縁の下をくゞるやうにて、句姿すくみ侍るもの也。うすくこくまじへて付べし。

〔一八〕

老女がいほに半日の客

関寺小町に、あしたに一鉢を得ざれどももとむるにあたはず。草衣ゆふべのはだへをかくさゞれ共をぎぬふにたよりありとうたふ也。半日の客人に鉢のうちをふるまひし心也。

〔語釈〕

○老女がいほ　惟中は前句の「一鉢」から、謡曲「関寺小町」の「朝に一鉢を得ざれども求むるに能はず。草衣夕の肌を隠さゞれども。おぎぬふに便あり」を連想し、同曲の「又この山陰に老女の庵を結びて候ふが」という冒頭から、「老女がいほ」を付けた。**○半日の客**　謡曲「鳥追舟」に「あやまつて仙家に入りて。半日の客たりといへども。　故郷に歸つて纔に。七世の孫にあへるとこそ」があり、同「志賀」にも「實にや誤つて半日の客たりしも」などとある。「鳥追舟」「志賀」ともに典拠は、『和漢朗詠集』「巻下」大江朝綱「謬ちて仙家に入りて　半日の客たりといへども　恐らくは奮里に歸りて　纔かに七世の孫に逢はむことを」である。惟中は、老いた小町の庵を仙家に見立てたのであろう。謡曲「鞍馬天狗」にも「げにや花の下の半日の客。月の前の一夜の友。それさへ好みはあるものを」がある。「半日」は、『邦訳日葡辞書』に「一日の半分」とある。

〔一九〕

請人を興範しきりにのたまへば

後撰集　ひがきの女の歌に、

としふれば我くろかみも白川のみづはぐむまで老にけるかな

との歌よみし女は、老女なり。付心は、とまり客人の請人也。一句は即、檜垣（ヒガキ）のうたひに、興（フキ）のりしきりにのたまへばあさましながら麻の袖とうたふ也。請人をたれなりとのたまふ句作也。さて此ばどまり、むさとはせぬ事也。ならひのある事也。

〔語釈〕

○請人　『邦訳日葡辞書』に「保証人」とある。**○興範**　藤原興範。平安中期の公卿。太宰大弐、式部大輔などをへて、延喜一一年参議となる。延喜一七年没。七四歳。謡曲「桧垣」の他に、「須磨源氏」にも「抑これは日向の国宮崎の社官。藤原の興範とは我が事なり」と宮崎の社官に仮託された興範が登場している。**○しきりにのたまへば**　惟中は前句の「老女」を、ここでは謡曲「桧垣」に登場する「百にも及ぶらんとおぼしき老女」に見立て、同曲の「昔手馴れし舞なれば。舞はでも今は叶ふまじと。興範しきりに宣へば。浅ましながら麻の袖。露うち払ひ舞ひ出す」という一節から、「興範しきりにのたまへば」を引用した。**○としふれば我くろかみも**　『後撰和歌集』巻一七・雑三に、「筑紫の白河といふ所に住みはべりけるに、大弐藤原朝臣のまかり渡るついでに水たべむとてうち寄りて、乞ひはべりければ水を持て出でて、よみはべりける」の詞書を付して、桧垣嫗「年経れば我が黒髪も白河のみづはくむまで老いにけるかな」「かしこに名高く事好む女になんはべりける」とある。**○とまり客人の請人**　前句の「客」をここでは庵に泊まる客に見立て、興範が「その客の請人は私である」と告げている情景に仕立てた。**○ばど**

まり　「しきりにのたまへば」のように、句が「ば」で終わること。「留」「留り」については、連歌の時代から様々な形式があった。惟中は延宝七年（一六七九）刊の『近来俳諧風躰抄』で、「一、ばとまり・は留り、当時むさとする事に成ぬ。本来哥のとまりなれば、一句・二句もしハくるしかるまじ。連哥にハ決定せぬ事也。俳諧とても、熟語を用ひて、

宇治ばしよりも右かひだりか　腎脉の水のさかまく所をば
梅翁

又、余が句に、ある席にて、

仏も衆生もかつほもいハしも　猫の子に本来逸物なき時は

と申ぬ。是などは憚あるまじきか。我当分作りもうけたる詞を、むさと、ばどめ・はどめにする事いかゞあらん」と記している。

〔二〇〕

なにの子細かおはしますべき
やり句也。

〔語釈〕

○なにの子細か　ここでは、前句の老女と興範の遣り取りを受けて、「何の子細がございましょうか」と軽く付けてやり過ごした。

〔二一〕

月花に風のこゝちと思しめせ
かろき風邪なれば、なんの子細もなしと付たる也。月花に風の字似合しきもの也。一句は例の寓言。

〔語釈〕

○風のこゝち　前句の「なにの子細」をここでは、風邪気味だが軽い風邪であるので何の差し支えもない、という意味に転じた。「月花に風」と「風邪の心地」の掛詞。**○月花に風の字似合しきもの**　『俳諧類舩集』「月」「花」の直接的な付合に「風」の語は見えないが、「花鳥風月」などの語を念頭に置いたものであろう。

〔二二〕

かすみのころもうす着しつらん
いかにも聞えたる句也。

〔語釈〕

○かすみのころもうす着しつらん　前句「風のこゝち」を受け、ここでは「ころも」を「うす着」したがために、風邪を引いたと仕立てた。前句の「花」の縁で「かすみ」と付けた。『俳諧類舩集』「霞」の付合は「衣」。『続後撰和歌集』春歌上　に、「立ちそむる霞の衣うすけれど春来て見ゆる四方の山の端」などの歌がある。**○いかにも聞えたる句**　前句「風のこゝち」を受けて「うす着」と付けたのは、大変わかりやすい句作であるという意。

〔二三〕

春のくる天のかご山駕でやれ
ほの〴〵と春こそ空にきにけらし。あまのかご山かすみた

なびく

一句は、かご山駕ととかさねたる也。付心は、うす着のかごのものにてやるこゝろ也。

〔語釈〕

○天のかご山　前句の「かすみ」から、『新古今和歌集』春上　後鳥羽院「ほのぼのと春こそ空に来にけらし天の香具山霞たなびく」を連想して、「春のくる天の香具山」と付けた。「香具山」は、『千載和歌集』の「君が代は天のかご山いづる日の照らむ限りは尽きじとぞ思ふ」のように「かご山」とも詠む。惟中は、「かご山」から乗り物の「駕」を想起し重ね置いたと註している。**○うす着のかごのものにてやるこゝろ**　前句の「うす着」を、ここでは駕籠かきの装束に転じたと、惟中は註している。

〔二四〕

とこ世の鳥ははねたゝくなり

駕(カゴ)を鳥籠にしたる也。韓退之(カンタイシ)が文に、感(ズル)二鳥一(ヲ)賦(フ)などといふも、名鳥(メイテウ)を籠(カゴ)ニいれ京洛(ケイラク)へやりたる也。

夫木廿八公朝卿歌に、

かぐ山のさかきがうれのほととぎすとこ世のとりの音にやなくらん

とよみたり。

〔語釈〕

○とこ世の鳥　前句「かご山」から、後出「かご山のさかきがうれのほととぎすとこよのとりのねにやなくらん」を連想して、「とこ世の鳥」を付けた。「とこ世の鳥」は、『古事記』に「常世長鳴鳥」、『日本書記』には「常世之長鳴鳥」と記されている。天照大神が天岩戸に籠った時に、集めて鳴かせたという故事がある。**○駕を鳥籠にしたる也**　前句の乗り物の「駕」を、ここでは「鳥籠」に見立てたということ。**○韓退子が文**　韓愈の「感二鳥賦一」に、「貞元十一年五月戊辰．愈東歸．癸酉自潼關出．息于河之陰．時始去京師．有不遇時之歎．見行有籠白鳥白鸚　而西者．號於道曰．其土之守(音狩)其官．使使(去聲)者進於天子」という一文がある。**○公朝卿歌**　『夫木和歌抄』巻八に、「中務卿親王家五十首歌合」として権僧正公朝の「かご山のさかきがうれのほととぎすとこよの鳥のねにやなくらん」があり、「判者光俊朝臣云、右とこよの鳥など、日本紀まで尋入りてけるさまに侍れば、勝の字をゆるさるべくや侍らん云云」との判詞が付されている。

〔二五〕

鼠戸に大真殿と額をうち

とこ世のとりのめづらしきを、鼠戸にて見する心也。楊貴妃の謡に、宮中(キウチウ)をみれば大真殿(タイシンデン)と額(ガク)のうたれたるとうたふ詞也。とこ世の国、とこ世のうてなどゝうたふ也。一句は鼠戸に額よし。又額はかくるといふ。うつとはよからぬとあれども、俳諧なればうたひを用てくるしからず。

〔語釈〕

○鼠戸　『邦訳日葡辞書』「鼠戸」の項に、「劇場などで、人々が入るために、いつも開けたままにしてあるくぐり戸」とある。惟中は、

前句の「とこ世の鳥」を見世物小屋の出し物の一つに見立て、人々を鼠戸から入場させて見せるという情景に仕立てたと註している。

○大真殿と額をうち　惟中はさらに「とこ世の鳥」から、謡曲「楊貴妃」の「常世の国に着きにけり〳〵」をも連想して、同曲中の「又教の如く宮中を見れば。太真殿と額の打たれたる宮あり」の一節から「大真殿と額をうち」を引用した。**○俳諧なればうたひを用てくるしからず　↓〔考察〕**

〔考察〕

惟中が、「俳諧なればうたひを用てくるしからず」などと註しているように、当時「謡曲」と「俳諧」とは密接な関係にあった。

遡れば、寛永期にすでに「賦物俳諧」の一環として「謡俳諧」があり、謡曲の曲名を詠み込むことが盛んであったという。寛永一二年（一六三五）の貞徳の判がある、未得「謡俳諧」などがその代表的なものである（藤井乙男『史話俳談』[註1]）。

一方で、寛永一〇年の重頼『犬子集』などに見られるように、謡曲を素材として取り入れる手法も一般的であった。『犬子集』巻一〇には、以下のような句が並ぶ。

猩々の能の仕舞の不出来さよ　　謡曲「猩々」
作りそこなふ此秋の菊
涙の川にはまる夕ぐれ　　謡曲「船橋」
船橋をはづすや親の無分別
ともすれば夢に日向の事斗
泪ねぢきるかげきよがつま　　謡曲「景清」
唐の世の其賢人の出合て
舟にのりたる住よしの神　　謡曲「白楽天」
悦をなす野のはらの往来にて
殺生石もくだく法力　　謡曲「殺生石」

傍線を付したように、これらの句は謡の曲名や謡曲に関連した語彙・謡曲の詞章を付合として作られている。

この謡曲の一部を取る傾向は、次第に広がっていくことになる。よく知られている句は、万治三年（一六六〇）刊行の重頼『懐子』掲載の、一幽こと宗因の「里人のわたりさふらふか橋の霜」であろう。これは謡曲「景清」から、「いかに此あたりに里人のわたり候ふか」を引用したものであった。

重頼は、『懐子』から数年後の寛文四年（一六六四）に刊行された『佐夜中山集』巻五の式目歌に、「諷舞世話や平家や太平記皆はいかいのよき友ぞかし」と記し、巻三には「諷之詞」の部を設けている。

惟中もまた、こうした風潮に大いに感化されていたと考えられる。延宝三年（一六七五）刊行の『俳諧蒙求』巻末には自身の独吟を掲載しているが、その発句は「文をこのむきてんはたらく匂ひ哉」であり、上七文字は謡曲「老松」の「さてこそ文を好む木なりけりとて梅をば」から引用したものである。この他にも、「とっておさへてやらぬ初雁」は謡曲「知章」の「取つて押さへて首かき切つて」から、「あきかぜやたまりもあえずぬけつらん」は謡曲「兼平」の「たまりもあへず馬上より」によるなど、謡曲の引用が多々見られる。

また、惟中作とされる延宝六年刊行の『俳諧或問』[註2]には以下の問答が見える。

問ふ。今の俳諧に謡付を専らとこのむは何のゆゑぞ。

答て云ふ。俳諧はあまねく世上の慰種となりて、老父と老婆と

が茶を呑むにも、一句つぶやけばやさしくなり、世をいきどほりて閑居する人も、句を求むれば彼の事此の事うち忘れ、朋友かたらひて野山をかけ廻るにも、我はかくして其の句にはかく付てといへば、千里の道も遠からず、和楽を以て専用とす。されば誰れもすべき俳諧なれば、力を不レ入して、和漢の跡詩歌の片端をもしらせんとするに、謡によきはなし。此の謡自然と国風のやうになりもて行き、高きもいやしきも、後紐とくより聞きもならひもすれば、我も人も能く覚えぬ。其の内には儒佛神道詩歌の話、凡そ聞きふれたる事おほし。ことさら物いはぬ草木鳥獣に物いはせ、死したる人をよび起こす、其の意趣聊か寓言のはだへあれば、さてこそ用ひ候。

〔二六〕

白居易が見る明がたの雲

大真殿の事、唐の白楽天が文にあり。明がたの雲は一句のかざり、鼠戸のあたりの風景也。

〔語釈〕

○白居易が見る　前句「太真殿」から、楊貴妃の登場する「長恨歌」を着想し、作者白居易の名を出した。「長恨歌」の一節に、「中有一人字太真　雪膚花貌參差是」とある。**○明がたの雲は一句のかざり**　「明がたの雲」は一句を飾る語であって、鼠戸のあたりの風景であると惟中は註している。

〔二七〕

しきたへの枕にのこる似せ銀に

しきたへは、まくらといふ詞の枕ことば也。付心は前句の見るといふにあたり、似せがねと付たり。枕に残るは、楽天が金鑾子といふ三歳のむすめをうしなひて、作りたる詩ニ、故衣ハ猶架ノ上ニ　残ノ薬ハ尚頭ノ辺ニ

このおもかげ也。

〔語釈〕

○しきたへの枕にのこる　惟中は前句の「白居易」から、彼の作である「病中哭金鑾子」を連想した。この詩には「故衣猶架上　残薬尚頭辺」という一節があり、ここから「枕にのこる」の七文字を想起してこれに「しきたへの」という枕詞を付けた。**○前句の見るといふにあたり、似せがねと付たり**　前句の「見る」を、ここでは「調べる・鑑定する」の意に転化して「似せ銀」を出した、と惟中は註している。

〔二八〕

すつぱとしめるあふさかの関

付心は関したり。あふさかは、まくらにのこるといふ旅人のおもかげ也。

〔語釈〕

○すつぱとしめる　関所がまさにぴしゃりと閉められるさまを、「すつぱと」という副詞で表現したものであるが、この「すつぱ」はま

た別の意味を持つ。『邦訳日葡辞書』「すっぱ」の項に「欺瞞、または、虚言」とあり、また「すっぱなもの」として「浮浪者、または、人をだます者など」とも記される。前句の「似せ銀」の縁で「すっぱ」が付けられたか。**○あふさかの関**　惟中は、前句「枕にのこる」ものは「旅人のおもかげ」であり、ここから「あふさかの関」を着想したと註する。『俳諧類舩集』「旅人」の付合は「逢坂」。**○付心は関したり**　旅人がやっとのことで越えようとした逢坂の関が、目前でしっかりと閉められてしまったということ。

〔二九〕

まおとこは木がくれたりと思ひけん
　すつぱに密夫（マヲトコ）也。古今集に、
君が代にあふさか山のいは清水木がくれたりとおもひけるかな
句躰は、まおとこにかくれといふ字、相応したる也。

〔語釈〕

○まおとこ　前句の「すつぱ」の縁で「まおとこ」を付けたと、惟中は註している。『邦訳日葡辞書』「マヲトコ」の項に、「有夫の女と密通している男」とある。**○木がくれたりと思ひけん**　前句の「あふさか」から、『古今集』巻一九の壬生忠岑の歌「君が代に逢坂山の岩しみづこがくれたりと思ひけるかな」を連想し、「こがくれたりとおもひける」の部分を引用し、「まおとこ」が人妻に会いに来て、人目を忍んで木の陰に隠れているという情景を仕立て上げた。

〔三〇〕

あだ名をかふるせみの羽ごろも
　源氏うつせみの巻、うつせみの歌、
うつせみの羽にをく露の木がくれてしのび〳〵にぬるゝ袖かな
歌の心は、うつせみの源氏にかくれ参らせたれども、うつせみの羽にをく露のごとく、袖のぬるゝは人しれぬと也。かゝる下ごゝろもあり。

〔語釈〕

○あだ名をかふるせみの羽ごろも　『邦訳日葡辞書』「アダナ」の項に、「もっぱら貞節に関する疑いから生ずる悪い評判」とある。前句「まおとこ」の縁で、「あだ名を冠せられた」と付けたか。また、惟中は前句の「木がくれ」から『源氏物語』「空蝉」の「空蝉の羽におく露の木隠れてしのびしのびにぬるる袖かな」という歌を連想して、「せみの羽ごろも」と付けたと註している。**○歌の心は**　光源氏の来訪を避けて隠れていた空蝉だが、実は陰でこっそり涙を流すほど彼に未練があり、その切ない思いを密かにこの歌に託したことをさす。

〔三一〕

付たげなよるはほたるのもえしきり
　火つけのあだ名をさゝれたる也。歌に、
明たてばせみのをりはへなきくらしよるはほたるのもえこ

そわたれ

〔語釈〕

○**付たげな**　前句の「あだ名」の縁で「付る」を出し、ここでは「付たげな」と付けた。○**ほたるのもえしきり**　惟中は前句の「せみ」から、『古今集』巻一一の「明けたてば蝉のをりはえ鳴暮らし夜は蛍のもえこそわたれ」を連想し、「夜はほたるのもえ」の部分を引用した。○**火つけのあだ名をさゝれたる**　前句の「あだ名」とは実は「火つけ」と名指しされたことであった、と惟中は註している。「明たてば」の歌が明らかに恋の歌であるところから、「火つけ」とは「恋の火を付ける者」という意味であったのだろう。

〔三二〕

あしまの舟はねたまにすらり
付たげなに舟也。ほたるに芦常の事也。

〔語釈〕

○**あしまの舟**　『俳諧類舩集』「蛍」の付合は「芦」で、「芦」の付合は「舟」。惟中は、「付たげなに舟」と註している。『邦訳日葡辞書』「アシマ」の項に、「葦と葦の隙間」とある。○**ねたまにすらり**　前句の「よる」の縁で、「寝た間」が出た。寝ている間に、舟が支障もなく進むさまを詠んだか。「あしま」と「ねたま」は、韻を踏んだもの。また、延宝八年（一六八〇）刊行の惟中『続無名抄』巻下「世話字尽」には、「推乱離（スラリ）」という記載がある。

〔三三〕

ぬすんだらあしたの月にさあああかせ
ねたまに、舟ぬす人がすらりとしまふたる心也。

〔語釈〕

○**ぬすんだら**　『俳諧類舩集』「寝」の付合は「盗人」。前句「ねたま」の縁で、「ぬすんだら」と付けたか。惟中は前句の「ねたまにすらり」をここでは、船主が寝ている間に舟盗人が舟を盗み、速やかに仕舞い込んでしまった情景に転化したと註している。

〔三四〕

きいたやうな句のあきの初かぜ
付ごゝろは、秋の初風といふ句をぬすみたる也。一句のしたては、風声を聞とむすびたり。

〔語釈〕

○**きいたやうな句**　下七文字の「あきの初かぜ」は、『新古今和歌集』式子内親王の「うたたねの朝けの袖にかはるなりならす扇の秋の初風」や、西行の「おしなべて物を思はぬ人にさへ心をつくる秋の初風」などさまざまな和歌に詠まれており、いかにもよく耳にする語句であることをいう。前句の「ぬすんだら」を、ここでは「あきの初かぜ」を詠んだ誰かの句を盗用した、と見立てた。○**風声を聞とむすびたり**　「きいたやうな」に、「秋風の音を聞く」の意をも含ませることをさす。

〔三五〕

以前よりこなたはわすれず雁の声

中の七文字はうたひの詞也。前句のきいたやうなを、雁の声にしたる也。

〔語釈〕

○以前よりこなたはわすれず　前句「きいたような」の縁で、「以前」が出たか。謡曲「松風」に、「こなたは忘れず松風の立ち歸りこん御音信」の一節がある。**○雁の声**　前句「あきの初かぜ」の縁で「鴈」を付けた。惟中は前句の「きいたような」ものの正体を、ここでは「雁の声」に見立てたと註をつけている。

〔三六〕

うつてとりぬるはまの真砂地

付心は、うつてとる碁の一手をこなたは忘れずと也。雁にまさごは、常の付もの也。碁の事を真砂とよみし歌は、拾遺に、おびをかけて御碁あそばしけるにまけたてまつりて、

白波のうちやかへすとまつほどにはまのまさごのかずぞつもれる

〔語釈〕

○うつてとりぬるはまの真砂地　前句「雁」の付合は、『俳諧類舩集』に「真砂地」とある。この「真砂地」から、『拾遺和歌集』巻九の御製「白波の打ちや返すと待つほどに浜の真砂の数ぞつもれる」を連想した。この歌の詞書には「天暦の御時一條摂政蔵人頭にて侍りけるに　おびをかけて御碁あそばしける　まけ奉りて御数多くなり侍りければ　おびを返し給ふとて」とある。この歌の「打ちや返す」から「うつてとりぬる」と付けた。**○付心は**　前句の「こなたは忘れず」の語をここでは碁の対局場面に見立てて、「うつてとる碁の一手」すなわち形勢逆転の一手を打たれたことをあなたは忘れてはいなかった、という意味に用いたと惟中は註している。

〔三七〕

かぶと首なみの藻屑とかゝれたるは

真砂にもくず、常の事也。一句のしたては、かぶと首をかゝれたる也。付心は、うつてとるに首也。

〔語釈〕

○かぶと首　碁の対局を意図した前句の「打ってとりぬる」を、ここでは合戦で「かぶと首」を「討ってとる」ありさまに見立てた。**○なみの藻屑**　『俳諧類舩集』「真砂」の付合の「藻」から、「なみの藻屑」を出したと惟中は註している。

〔三八〕

とぶらふ入道あまのつり舟

水邊のよりにて付たり。前句の首を、入道もあまもとぶらふ也。

〔語釈〕

○とぶらふ入道　前句の「なみの藻屑とかゝれたる」「かぶと首」は、謡曲「敦盛」の討死場面を想定して付けられたか。よってここでは、その敦盛を弔う熊谷直実こと蓮生入道を登場させ、「とぶらふ入道」と付けたのであろう。**○水邊のよりにて付たり**　前句の「なみ」や「藻」などの寄合として、「あま」「つり舟」を連想した。「海士」は、「尼」との掛詞。

〔三九〕

枚たてるかど屋が酒はなにと〳〵

入道も漁夫（ギョフ）も酒をたづねて何と〳〵ととふ心也。

漁夫の題にて邵康節（セウコウセツ）の作ニ

網裏無魚（モウリ）無酒（シ）ニ錢酒家門外ニ口流涎（ナガス　ヨダレヲ）レ

古今の歌に、我いほは三輪の山もとこひしくばとぶらひきませ枚たてる門

〔語釈〕

○枚たてる　惟中は前句「とぶらふ」から、『古今和歌集』巻一九「我庵は三輪の山もと恋しくばとぶらひきませ杉たてる門」を連想し、「枚たてるかど」と付けた。『俳諧類舩集』「杉」の付合は「酒はやし」。杉の木の立っているという「家の門」を、ここでは杉の酒林を立てた酒屋に取り成して一句を仕立てた。**○なにと〳〵**　前句「あまのつり舟」の「あま」から、謡曲「藤戸」の「海士の刈る藻に住む蟲の我からと。（中略）さてなう我が子を波に沈め給ひしことは候。あゝ音高し何と〳〵」の一節を連想し、「なにと〳〵」を引用した。**○漁夫の題にて邵康節の作**　惟中はまた前句の「あま」（海士）から、「漁夫」と題された漢詩「網裏無魚無酒銭　酒家門外口流涎」をも連想し、入道や海士が酒屋を訪うとの意を含ませて一句を仕立てたと註している。『俳諧類舩集』に「酒屋の門外」の項があり、付合が「涎」であるのはこの詩を典拠としたものであろう。しかしこの「漁夫」の作者は、宋の葉唐卿である。邵康節の作に「漁樵対問」があるが、この漢詩とは異なるものである。

〔四〇〕

ふむからうすはあゝ音高し

ふじ戸かのうたひに、あゝ音高しなにと〳〵とうたふ詞也。

酒屋のからうす也。

〔語釈〕

○ふむからうす　前句「酒屋」の付合は、『俳諧類舩集』に「碓」。「碓」の付合は、「踏・足音」である。ここから「ふむからうす」を出したか。**○あゝ音高し**　前句の「なにと〳〵」の典拠である謡曲「藤戸」の一節「あゝ音高し何と〳〵」をここでも引用して、「からうす」を踏む音が高いという情景に仕立てた。**○酒屋のからうす**　貞享四年（一六八七）成立とされる『童蒙酒造記』「碓（からうす）仕掛」の項に「一、桯（さほ）木、長九尺、高七寸、幅六寸。右之外に踏板（くつ）付也」などと記される。宝暦四年（一七五四）刊行の、『日本山海名産図会』巻之一「摂州伊丹酒造」の項にも、「舂杵（うすつき）」として「酝米ハ一人一日に四臼（一臼一斗三升五合位）酘米ハ一日五臼上酒ハ四臼極て精細ならしむ　尤古杵を忌みて是を継くに尾張の五葉の木を用也」とある。

〔四一〕

時の太鼓なる神よりもおどろ〳〵
　あゝ音高しに太こ、からうすになる神也。源氏ゆふがほの巻に、
　ごほ〳〵となる神よりもおどろ〳〵しく、ふみとどろかすからうすのをとも、まくらがみとおぼゆ。
　こゝの文章の景気也。

〔語釈〕

○時の太鼓　前句の「音高し」の縁で、「時の太鼓」を付けた。「時の太鼓」は、時を知らせる太鼓。貞享二年（一六八五）刊『西鶴諸国ばなし』「公事は破らずに勝つ」に、「この太鼓いつの頃か、西本願寺に渡りて、今に二六時中を、勤めける」と記されている。また、貞享五年刊西鶴『武家義理物語』「御堂の太鼓うつたり敵」にも、「お八ツのしらせ太鼓うちぬれば」とある。**○源氏ゆふがほの巻**　惟中は、前句「ふむからうす」から『源氏物語』「夕顔」の巻の一節、「ごほごほとなる神よりもおどろおどろしく、踏みとどろかす唐臼の音も枕上とおぼゆる」を連想し、「なる神よりもおどろ〳〵」と付けた。**○こゝの文章の景気**　惟中はこの句で、「夕顔」の賤の屋の情景を忠実に踏まえたという意。

〔四二〕

御堂参りをしがらきの山
　一向宗の御堂の太こ也。新後拾遺　承覚法親王（ジヤウカク）
　なる神の音もはるかにしがらきの外山をめぐるゆふだちの空

〔語釈〕

○御堂参り　前句の「時の太鼓」から、「御堂の太鼓」を連想して「御堂参り」と付けた。「御堂」とは、本願寺の大坂別院のこと。『日本名所風俗図会』には、「津村御堂　御堂筋本町の北にあり。表御堂また北御堂ともいふ。京師西本願寺抱所なり。」「難波御堂　御堂条久太郎町にあり。裏御堂、また南御堂とも称す。京師東本願寺の抱所なり」とあり、南北それぞれに東西本願寺の御堂があったことがわかる。ちなみに、前述の「御堂の太鼓うつたり敵」の「御堂」は、「南の御堂」である。しかし『風俗図会』所載の図を見ると、いずれの御堂にも鼓楼が描かれている。惟中の註にいう「一向宗の御堂の太こ」が南北どちらのものかは判別し難い。**○しがらきの山**　前句「なる神」、すなわち「雷」の付合は『俳諧類舩集』に「信楽山」とある。**○なる神の音もはるかに**　『続後拾遺和歌集』巻三に、天台座主承覚法親王の「なる神の音もはるかにしがらきの外山をめぐる夕立の雲」がある。

〔四三〕

土のもの庄園おほくよせられて
　しがらきやきの土の物也。つれ〴〵草に、御堂（ミダウ）どのゝ作りみがゝせたびて、庄園（セウエン）おほくよせられとある所を付たり。

〔語釈〕

○土のもの　前句の「しがらき」の付合は、『俳諧類舩集』に「焼物つぼ・茶碗」とあり、ここから「土のもの」と付けた。惟中も「しがらきやきの土の物」と註している。『邦訳日葡辞書』「シガラキ」の項に、「茶を入れるある種の壷を産する所、あるいは、それが製造される所。また、その壷自体」と記される。**○庄園おほくよせられて**　前句の「御堂参り」から、御堂関白（藤原道長）を連想した。惟中は『徒然草』第二五段の一節「京極殿・法成寺など見るこそ、志とゞまり事変じにけるさまは、あはれなれ。御堂殿の作りみがゝせ給（ひ）て、庄園多く寄せられ、我（が）御族のみ、帝の御後見、世のかためにて、行末までとおぼしおきし時」から、「庄園おほくよせられ」の語を付けたと註している。

〔四四〕

日傭がうへし桔梗かるかや
桔梗かるかやを、つちのつきたるものにしたる也。庄園に、おほく秋草をうへられし也。

〔語釈〕

○日傭　『邦訳日葡辞書』「ヒヨウ」の項には、「賃金を出して傭った者」とある。前句の「庄園」の縁で、「日傭」と付けたか。**○桔梗かるかや**　前句の「土のもの」を、焼物から土の着いた「桔梗かるかや」に取り成したと、惟中は註している。『俳諧類舩集』「桔梗」の付合は「刈萱」。謡曲「大江山」に、「頃しも秋の山草桔梗刈萱破帽額。紫苑といふは何やらん」の一節がある。

〔四五〕

あはれなるうづらごろものあしたゝき
子夏が鶉衣とて、あしたゝきのみじかきるもの也。
寂蓮の歌に、
粟津のゝかやが下行われわびてうづらなく也あきのゆふぐれ

〔語釈〕

○あはれなるうづらごろも　前句の「かるかや」の付合は、『俳諧類舩集』に「鶉」である。惟中は、「日傭」の作業着を「鶉衣」に見立てて、「あはれなるうづらごろも」と付けたのであろう。「鶉衣」は『荀子』「大略」の一節「子夏家貧　衣若懸鶉」による。紹巴の『至宝抄』「中の秋」の項に、「一鶉　鶉衣とは短衣なり」と記されている。『俳諧類舩集』「鶉」の付合も、「みじかき衣」。**○あしたゝき**　未詳。**○寂蓮の歌に**　『夫木和歌抄』巻二八に、「百首歌」として寂蓮法師の「あはづののかやが下をれわけわびてうづらたつなり秋のゆふぐれ」がある。

〔四六〕

ふんぞりかへる野べのあきかぜ
ゆふされば野べのあき風身にしみてうづらなく也ふかくさの里
この歌などの詞づかひ也。

〔語釈〕

○ふんぞりかへる　『邦訳日葡辞書』「フンゾル」の項に、「両足をうんと伸ばしている」とある。前句の「あしたゝき」の縁で、この語を付けたか。**○野べのあきかぜ**　前句「うづら」の付合は、『俳諧類舩集』に「野べの秋風」とある。**○ゆふされば**　『千載和歌集』巻四皇太后宮大夫俊成の「夕されば野辺の秋風身にしみてうづらなくなり深草のさと」がある。

〔四七〕

月の入山こそなけれむさし坊
　むさしのは月の入べき山もなし尾花がすゑにかゝるしら雲
　この歌にてむさしにいひかけし也。
　ふんぞるに、六尺ゆたかなる弁慶法師也。

〔語釈〕

○月の入山　前句の「ふんぞりかえる」から、「弁慶」を連想したと惟中は註している。また、「武蔵坊弁慶」の名から「武蔵野」を着想して、『続古今和歌集』巻五の「建保三年内裏の歌合に」と題された大納言通方の、「むさしのはつきのいるべきみねもなしをばながすゑにかかるしらくも」という和歌を用いて一句を仕立てた。**○むさし坊**　武蔵野との掛詞。**○六尺ゆたかなる**　『俳諧類舩集』「弁慶」の付合は、「六尺」。

〔四八〕

しらあやたゝむ西海のなみ
　むさし坊に、しら綾也。一句の躰は、浪のあやをたゝみたる也。月の入二西の海よし。

〔語釈〕

○しらあやたゝむ　前句の「むさし坊」から、弁慶の鉢巻姿を連想して「しらあや」と付けた。惟中は、「むさし坊に、しら綾也」と註している。奈良絵本『義経地獄破』[注3]には、「時のこゑもしづまりければ、武蔵坊弁慶は、ねりきぬのひたたれに、むらさきすそこのきせながが、草ずりなかにきなして、しらあやたゝみて、はちまきとし、七つ道具をうしろにさし、長刀を水車にまはし」という一節がある。大津絵などに見られる弁慶像も、鉢巻姿のものが多い。**○西海のなみ**　前句の「月の入」から、「西海」を着想した。**○一句の躰は**　『俳諧類舩集』「綾」の付合は「波」、「波」の付合は「畳」。「白綾を畳む」と「波の綾を畳む」を掛けた。

〔四九〕

舟につむにしき千端花みえて
　にしき千たんあや千たんとつゞきたる事あり。綾（アヤ）も錦（ニシキ）も唐船につけたる心也。花の錦はいふに不及。

〔語釈〕

○舟につむ　前句の「西海」の縁で、「舟」を付けた。**○にしき千端**　前句の「しらあや」の縁で、「にしき」が出た。**○花みえて**　「錦」

の付合は、『俳諧類舩集』に「花盛」である。**○にしき千たんあや千たんとつゞきたる事あり**　宝永二、三年頃（一七〇五–六）大坂竹本座初演の近松門左衛門作『松風村雨束帯鑑』に、「つんだるたからはどれ〳〵ぞ。あやが千だん錦が千だんから物をつみたゝへて」とある。これは近松が同作品に取り入れた、狂言『靭猿』の「猿唄」の一節である。「猿唄」は、中世から近世初期の歌謡などを素材として創作されたものであるという（『大蔵虎明本狂言集の研究』[注4]）。また、柳田国男の研究でも知られる豊後地方の伝説「満能長者（満野とも）」の娘譚として、山口県平生町の般若寺に伝来する『般若姫物語』[注5]巻三にも「白布千反、黒布千反、錦千反、唐綾千巻」の一節が見える。**○綾も錦も唐船につけたる心**　「錦」「綾」ともに付合は、『俳諧類舩集』に「唐」とある。

〔五〇〕

伊達こきまぜし柳にさくらに

見わたせば柳さくらをこきまぜて宮古ぞ春のにしき也ける

一句は、こくといふ字を句にしたる也。下の句のにどめ、ならひあり。かやうにに文字二あれば、先とまる也。又花に桜も子細あり。これは花のにしきなれば、付てくるしからず。前句、似せものゝ花也。

〔語釈〕

○伊達こきまぜし柳にさくらに　惟中は前句の「にしき」から、『古今和歌集』巻一「花ざかりに京を見やりてよめる」と題された「見渡せば柳さくらをこきまぜて都ぞ春のにしきなりけり」の一首を連想し、さらにこの歌の「こきまぜて」から「伊達こき」の語を着想して一句を仕立てた。「伊達こき」は、好んで派手な装いをする人。寛文六年（一六六六）刊の『古今夷曲集』に、保友の「見渡せば柳桜に都衆だてこきまぜて行東山」がある。また延宝五年（一六七七）刊の惟中『俳諧三部抄』下巻「惟中吟」の中にも、「弁恩（ママ）入無為の都の伊達こきに」の一句が見える。**○一句は、こくといふ字を**　惟中は、「こく」という字を使って一句を仕立てたことを誇っている。**○下の句のにどめ**　→〔考察〕　**○花に桜も子細あり**　前句の「花」に対して、ここで「さくら」を出すと指合となってしまうこと。本来なら去嫌の法則に反するので出すべきではないが、惟中は前句は「花のにしき」で花のような錦のことであるから、ここで桜を付けてもかまわないと註する。また、前句の「花」は実は贋物の花という設定なので、支障はないとするのである。

〔考察〕

「留」または「留り」については、連歌が盛んに行われた時代から取沙汰されていた。「にどめ」に関して言及しているものを挙げれば、まず二条良基の『連理秘抄』に「てにをはは大事の物也、如何によき句もてにをはの違ひぬれば、惣て付かぬなり、事により様に随ひてことに斟酌すべし、にの字は上の句にてはよし、下の句にてはきゝよからず」とある。また宗祇の『長六文』に、「てにをはの事、（如何成が違ひ、如何なるが合ひて侍ると云事）、唯句を吟じて可心得事候、或ひは疑ひのや、哉と又は畢ぬ、惣じてとぢめたる言葉侍りては、て共、にとも留り侍らず」と見える。

俳諧においては、寛永一八年（一六四一）の徳元『誹諧初学抄』に、「下の句のにどめ・てどめは千句にも一とあり。誹諧にはいくつも

可有之」とある。貞徳の『天水抄』にも、

にどまりの事　かと云ては、おさへ字なくはあしゝ。

逢程は夢かうつゝかとばかりに　是はよき也

こそと云てにどめは、こそと云てて留りのならひと同じ。

朝こそ起も出べきかりぶしに

下の句のにどめ、おさへ字専一也。はの字に習有。

霧はとやまに露は籬に

などと記される。季吟の花押のある延宝二年（一六七四）の『埋木』にも、

下句にどまり

袖ハなみだに露ハもすそに

かやうに持あひたる句、又ハふくむるてには、かへるてにはなどにて、とむべし〳〵

という記述が見える。

注

注1　「史話俳談」『藤井乙男著作集』第三巻所収（一九四八年二月　秋田屋）

注2　『俳諧或問』は修竹堂なる人物によって書かれた俳論作法書で、延宝六年に江戸で刊行されている。大村花陽軒の跋文には、「修竹堂の主人といふものあり。関西より来りて東武のかたはらに僑居す」とあるが「修竹堂」については未詳である。しかし上巻には、「殊には備陽の一時軒、梅翁に親炙して、悉く其の妙を伝へ、荘子が寓言の俳諧にかなふ事を論じて、後学にみちびく。されば俳諧の道は、守武草創し、宗鑑討論し、梅翁一時軒潤飾すと申すべし」「寓言とは、我心に思ふ事を、物に比し事に託して云ひ出すの義也」などと記され、惟中色が濃く表れている。文中にも「一時軒」の名が数多く登場し、下巻には宗因点の惟中独吟百韻が載るほか、因幡・備前の連衆の名が目立つなど、惟中の著書『俳諧蒙求』との共通点が多々うかがえる。

注3　『在外奈良絵本』所収（昭和五六年　角川書店）

注4　『大蔵虎明本狂言集の研究』「本文篇上」（昭和四七年八月　表現社）

注5　『般若姫物語』「般若寺本『満野長者旧記』より」平生町郷土史調査研究会編集（平成二年三月）

本稿は、二〇一二年度の大学院「近世文学演習」において、藤江峰夫先生のご指導およびご助言をいただきながら大江が行った発表原稿に基づくものである。